

星草村歴史博物館のおはなし



せい 作・絵

☆もくじ☆

- ☆一、カメがカメになったはなし …… 2
- ☆二、ウサギがウサギになったはなし …… 9
- ☆三、キツネがキツネになったはなし …… 14
- ☆四、シカがシカになったはなし …… 23
- ☆五、ライオンがライオンになったはなし …… 30
- ☆六、トラがトラになったはなし …… 36
- ☆七、ネコがネコになったはなし …… 42
- ☆八、サルがサルになったはなし …… 48
- ☆九、動物が動物になったはなし …… 54

★登場動物紹介☆

☆星草村あれこれ★

あとがき

星草村歴史博物館のおはなし(1)ーカメがカメになったはなしー

『星草村歴史博物館』とかかれた建物の窓に、「ただいま昼休み中。絶対立ち入り禁止ー!」

と書いた大きな紙がはつてありました。そのとおり建物はしずまりかえつてひとけはありませんでしたが、紙と窓のほそくすきまを目をこらして見れば、一匹の亀のおじさんが分厚い本とたがめつてゐるのが見えたはず。この亀の名は、実努理野(ミドドリノ)亀駄(カメダ)といました。たいへんきむずかしい、本好きのおじさんで、この博物館の館長(じかんちょう)も、じいじで働いてゐるのは、カメダさん一匹だけですが(ご)をこつてゐました。みなさんは、こんな感じの悪いおじさんがいる博物館なんて行きたくないと思つてしまつて。ところが、星草村の住民たちはこの博物館が大好きでした。なんといっても、村に一軒きりの博物館ですし、この博物館では昔の昔の昔のじいじまで、すいびんをこつて知れるから(じ)でした。

そんなわけで、カメダさんにはほとんど休みがありませんでした。二十四時間、三百六十五日、ひっきりなしにお客さんが来るからです。休館日(きゅうくわんにち)は、よつものなら、苦情(くせい)がさつてしまつた。それで、カメダさんはお客が少ないお昼(ひる)は、ん時に休むしかなかつたのです。

でも、カメダさんの「休む」は、体をやすめる(やすめる)じいじはありません。神経を休める(やすめる)ことでもありません。大好きな『動物の歴史大百科』を読むことなのです。カメダさんは、毎日のお昼休み、少しずつせつせつと動物の歴史大百科を読んでいました。今日は、「じいじまで」。今日は「じいじまで」と決めて。そして今日は、動物の歴史大百科一巻を読み終わったので、動物の歴史大百科二巻「亀が亀になったわけ」を読むのです。

* * * * *

(完)

* * * * *

カメラさんは、ボタンと本をとりました。ぼくたちの祖先はこんな悪いやつだったんだと、ちょやっシヨツカ
でした。そのじい、一階の博物館へ、

「じいちゃん、

とじい声がしました。

「あれ、今日は休館日だったかな？」

カメラさんは本をしまし、あ、あ、あ、一階におりこぎました。

と、ウサギが言いつつ、リスは少しじまじまとして、

「これが一番小さな声なんですけど……大ガラスさんの足にひつかつてお耳がのびてしまったようですね。せつせつはなれてお話ししますね。」

と答えました。ウサギはおどろいて、大ガラスの涙でできたらしい、水たまりをのぞきこみましたが、そこに耳したのは耳が。ドヨン、ドヨン、長い、自分の顔でした。ウサギはシヨツツと泣きだしてじまじましました。

「まめまめ、泣かなさうなウサギさん。じつとも独特ですけれど思えるわ。」
だいび、はなれたところからリスがなぐさめてくれましたが、ウサギの耳には入りませんでした。

「じつ、ウサギの悪いせいで、つまり盗み聞きへのせは治りました。耳があまりにもよく聞けるのよ、近くにいることができなくなったのです。また、遠くからだねかの話声が聞こえてきても、ウサギはもじだねにせつせつならじつじまじまじました。」

(完)

* * * * *

カメラさんは、時計を見ました。一時半をまわったところでした。この時、カメラさんは何とも言えない不思議な気分になりました。そして、カメラさんは席を立ち、コートをつかみました。

クリスマス朝、カメラは、寒いのもかまわず、ベランダからとびだしました。部屋のすみと、暖炉にじもいた、くじしたプレゼントを見つけたのよ。あ、だねかからさうさ。サントナは必ずしくかへれないのにカメラは不思議に思つて部屋のすみにおいで、ゆる、細長い包みをあけてみました。そして、

「は、はい、かしこまりました。」

商人はふるえながら言うのと、包丁を持った手をおろしました。

「ま、待つてくれーそんなの不公平だー」

お金持ちはさげびましたが、おじいさんににらまれ、すじすじと帰って行きました。

精算をすますと、おじいさんはづたをかつぎ、堂々と帰って行きました。けれどもその時、

「あー」

商人は、おじいさんの腰のあたりに、キツネのしっぽがあるを見つけました。へそっ、だまされたか？商人はあわてて鉄砲をとりて走りましたが、やたいにもどとみる、もうおじいさんの姿は消えうせ、しじにのつていたお礼も、ただの枯れ葉になつていたのでした。

(完)

* * * * *

カメラさんは、本をどい、ふーと息をつきました。そして、田をじぶりゆり椅子を前に後ろにゆらしながら、ちよんや風寝を、と思いましたが、その瞬間、カメラがどびいどびいどびい

「カメラさん！スウェーデンの方がたしか、アルマジロをたていつていたわーが、アルマジロの歴史について教えよほつてんー」

とどびまじりました。

「わ、わかりました？すへへ行くへ、言やごいだれんご」

と聞いてしまった。

「はい、おはよう。」

カメダさんは思いきり首をのびて、女の子をにらみました。それは、だれもがちぢみあがるような田舎じみで、
 したので、女の子はほとんど平気なもので、

「あ、これは、バイトの配達員やさんの。喜喜乃(キキノ)というの。おじさんとした、月草村の博士たちから小包が来てるわよ。」

と聞いて、カメダさんに重い、四角い包みをわたしました。

「お茶でも飲まない？」

今ではかなり、積極的になったサネリが聞きましたが、女の子は

「ううん、まだ仕事があるから。サンキュー！」

と聞いて帰って行ってしまう。カメダさんは、せつかくの楽しいお茶をじゃまされ、不機嫌でしたが、カメ
 ヨとサネリはキキノにうっとりしていました。カメヨたちは、「最近の流行」や「自由」なキキノにひかれ、カメ
 ダさんは、それが悔しく、や、や、きもちをやっていたのかもしれないね。

この日はめずらしく、一日ほとんどお客が来ませんでした。カメヨとサネリは久しぶりにポシエツを肩に、
 町に出かけていきました。この包み、何が入っているのかな？カメダさんは気になり、さつき届いた包みを開
 きました。中には、「ハッピーバースデー ツキ&ウミ」と書いたカードと、お月さま色の、「コンパイトウのキー
 ホルダー。それに、『動物の歴史大百科』第三巻が入っていました。カメダさんは、ホッと心が温かくなりました。
 時間があつたら、月草村と日野草村に行こうかな。と思うながら、そと『動物の歴史大百科』をひらいたの

包みに入っていたのは、二千円分の図書カードでした。『動物の歴史大百科』四巻を買う時につかおう、と決めて、カメダさんは一人、くすとわらったのでした。

ライオンの苦勞を、少しも知らないおへさんが言いました。

「ばかな」と言つてもないやない。私は永遠の二十歳なのだ。」

ライオンは泣きたくなるのをいじらなくて言つて、急いで自分の部屋へひきあげました。そして、いじりパンパンを開きました。

一週間後。

「じゃ、行くきまーす。」

「行くらうぜ。」

今日は、おへさんの美容の一日。一日中、体を整えて歩くのです。少しもなら、おへさんが出かけてしまつと、少しも思へないライオンでしたが、今日は早くおへさんに出て行くつもりで、いじりずいじりしていました。なにして今日は、今後の人生に関わるような、とても大事なことがあるのです。そして、その「大事なこと」はおへさんは、あまり関わるとほしくない、といつのがライオンの気持ちでした。

ありがとうございます。おへさんの方も、早く体を美しくしたい、と思っていましたから、ライオンの「大事なこと」が始まる前に、出かけてしまいました。

数時間後。

「いちびり、ハイエナ配達です。発毛薬を配達にまいりました。」
気持ちの悪い、いかにも「悪党」な感じの音がしました。

「あ、はい。そいじり置かうわねえ。」

ライオンは、ゆり椅子にのりかへ、『五十歳からの哲学』を読みながら言いました。すっかり満足している様

子でした。

ハイエチ配達さんが帰ってしまうと、ライオンはよろらしよ、と立ち上がり、玄関に行きました。そして、カーペットの上に置いてあった、いかにも「毒薬」って感じの液体が入った小びんを取り上げると、台所へむかいました。そして、小びんのふたを開けると、コップ一杯の水といじよた、「毒薬」って感じの液体を飲み込みました。

その日の夕方。帰ってきたライオンのおくさんは、夫がいつにましても、上機嫌なのに気がつきました。が、(きんや)、モーシアルアのシーデーでも買ったんでしようね。よかった、よかった。とたいして気にもしませんでした。

あくる朝……。

「ひゃーっー」

動物たちは朝のさわやかなぬもりから、たちにおこされました。かいじゅうかきよりのじゅうがあげる、瀕死のそげび声のようなものが聞こえたのです。

「何があつたんだー」

「ひなんしなへつはー」

「おれは、男だー何とこでも戦つてぞー」

動物たちは、みんな……いえ、ライオン以外は、みんな外へ飛び出しました。けれど、見たところ、町は何の被害もつけないようにすす、待てへへらせど、何もおこりません。そのうち、みんな、きんや、だれか臆病な動物が、おどろいたか何かで、悲鳴をあげたのだらうと考え始め、帰ってしまいました。いちばん最後まで残つて

「うーん、少いおりましたが、相手は総理大臣です。ふいふに歯向かえる相手ではないので、仕方ない」「それ、どうだい」

と答えました。そして、『動物の歴史大百科』をいっぺん、目を輝かせているホシノさんのとなりで、バサッと適当にページを開き、「これまでになくらい、たいへん不愉快な気持ちで読み始めたのでした。」

* * * * *

第五章「トラがトラになったわけ」 ゴウトカバ著

そのころ、動物の国を治めていた王様は、トラでした。もう、長い間王様をやっていたので、なぜ、トラが王様になったのか覚えている動物は、一匹もいませんでしたが、トラは、いしも遊んでばかりで、ちやも公務をしたことがないので、みんなは、早く王様を辞めてほしい、と思っていました。

ある朝のいよひに、トラがいつものように、家来に運んでもらった朝食を、絹の布団の上で食入して、一匹の家来がやちきて言いました。

「お食事申中申し訳いけません、閣下。重大な報告があります」「なむ、なむいせ」

「先日、閣下の政治に対し、文句を言ってきた者がありましたたね」「うん、ライオンとかいたな。おや、国民がさわいおおる。何かの？」

「それ、その昔で、いっついわけか分かりませんが、今、国民が尊敬しているのは閣下で、へななライオン、ライオンの、おののけは閣下に不満を感じていっぺん、おののけは閣下たちには閣下の政治に不満を感じていっぺん、おののけは閣下」

「なぬ、本当かー」

と、カメダさんは得意げに言いました。

「は、は、あ。ありがとうございます」

総理大臣は、決まり悪そうに頭をかくと、すすすすとして帰って行きました。

「いい出身の動物が作ったお話でもいいよか？」

「うん、まあ、いいんじゃない？」

「それなら？」

カメダさんは、急いで自分の部屋へ行くと、『動物の歴史大百科』をかかえてもどいてきました。そして、不思議そうな顔をしているトラータさんの前で、大百科を開いたのです。

* * * * *

第十三章「ネ」が「ネ」になったわけ

ホシクサムラ著

家に二もり、大好きな実験をやっていたネのもとへ、親友のカラスがやってきました。

「やあ、ネ」君。君は相変わらず、科学的だねえ。今日は何を作っているんだい？」

「動物に筋肉をつける薬だよ。ただし、一時間だけね。…で、今日は何かあったのかい？」

「君、知らないのかい？」

「ぼくが社会的でないことは、君も知っているだろう？」

「そうだった。じつはな、来月の十二日、野原で『力持ちはだれだ大会』をやるんだ」

「へーえ、そんなこと、ぼくは嫌いだね」

「それくらい、ぼくは分かってるよ。ただね、困るのは、その大会に、ネ」科の動物が、みんな出場するじゃないか。あつ、ライオンは審査員だから、出ないんじゃない？」

「へーえ、別にいいじゃないか。何が困るんだい？」

「みんな、君が大会に出ようとしていないから、弱虫だと思ってるんだ。それで、君をバカにしている。ねえ、君も

「出場していいよ」

「いやだよ。ぼくをバカだと思ってる連中には、そう思わせておけばいいわ」

「ぼくは君がバカに思われてるのを見ていられないんだ。なあ、お願いだよ。出場していいか」
友だちにここまで言われては、かないません。ネ「はいぼく考えた後、言いました。」

「分かったよ、出場しよう」

「わーい、やったあーありがとう」

カラスは大はしゃぎです。ネ「は、少し照れくさそうに頭をかきました。そのとき、不意にカラスがさげました。」

「どうしよう、ネ「君ー」

「今度は何だろう」

「あ、さ、君ってヤマネコや、チーターにくらべたら、力、弱いよね。君が出場して負けたら、よけい、いじめられる」

「君が、出場しろって言ったくせに。うーん、でも、どうしよう。あ、さ、その大会って、何をやるの？」

「井戸の水汲みさ。いちばん早く水を汲み終えた動物が、勝ちなんだって」

カラスは、不安でガクガクしながら説明しました。ところがネ「は、それを聞いて安心したようですよ。」

「なに、かんたんじゃないか。今、ぼくが発明した薬をちよつと改良すれば…ぼくが考えた作戦はね…」
そっしネ「は、カラスの耳に、そっ、その作戦をささやいたのでした。」

その日から、ネ「の家では、ヒューヒュー、バチバチ火花が飛び、家の窓を、何かが突き破ることもありました。

動物たちは、またネコが変な実験でも始めたな、と思い、あきれていました。

いよいよ、大会当日になりました。いつもは静かな野原が、今日は動物たちの熱気と活気で、あふれかえっています。そして、とうとう、審査員たちが席につき、選手入場の鐘が鳴り響きました。先頭に立って入場してきたのは、チーターです。ピチピチのスポーツウェアに長身をつつみ、サングラスをかけ、オリンピックに出るスターのようです。次に入ってきたのはヤマネコ。特に、派出なかつくうではありませんが、体力があり、確実に優勝を狙えます。

その後も、たくさんの選手たちが入場して来ました。そして、最後にネコが出てきました。ネコを見たとき、観客たちは

「ああー」
と声をあげました。これまで、この大会に出ないから、と言って、ネコのことをさんざんバカにしてきましたが、まさか、ほんとうに出場するとは思わなかったのです。それに、いよいよ出場するとなると、おそろいものではなく、偉大な発明家のモグラでさえ、ほめるほど、ネコには科学の才能があったからです。もしかしたら、ロボットをつくっていて、水汲みを手伝わせるつもりかもしれません。

選手たちがスタート地点についたとき、観客たちから、声があがりました。

「ズルイぞ、ズルイぞー」
審査員たちは、おどろいて

「静粛にー」と言いました。「観客たちのなかで、だれか一匹、代表で意見を言ってくれ」
しつこく叫びつづめた後、水中モグラが立ち上がりました。

汲むと、二百メートルほど先の台に走り、台に桶を置きました。それから、ゴールまでの百メートルを、猛スピードで駆け抜け、みごと一位になったのでした。ええ、そう、ネコの毛こそが、力をつける薬だったのです。ネコとカラスは、何度も実験をかさね、ネコが作った、液体の薬を細長く固め、毛の間にくっつけたのです。そして、結果はごらんのとおり、大成功でした！

動物たちは、さっきの検査で、ネコが不正行為をしていないことが証明されたので、ネコが何もかも実力でやっつけたーある意味、そうともいえますがーのだ、と思ひ込みました。そんなわけで、ついさっきまでは、出場者のなかで一番バカにされていたネコが、今では一躍有名のスターになったのです。(完)

* * * * *

「おー、すーい、お話ですねー」トラーダさんは、感激したように言いました。「あー、でもー、もう、失礼なことは、なーりませぬ」

トラーダさんを見送った後、満足そうな顔で外を見ているカメダさんのところへ、カメヨがやそ来て、言いました。

「カメダさん、サハラ砂漠から来た、ラクダ・ラク・ヨさんそ方が、星草村の民話を教えてほしいぞー」

るのう、がんばるぞお(サルは、)う決心しました。

あくる朝。サルは、図書館へ出かけ、かばんがゆるすかぎり、ガリネコの伝記をつめこみました。それから家へ帰るの、い、い飯を食べるのも忘れて伝記を読みあさりました。

「な、なるほじー」

「うむ、さすがだ」

「ま、まいったー」

と、ごんな声をあげながら。そして、次の朝までには、昨日借りた三十冊の伝記を、すべて読み終えています。サルは、本当ですが、いい気持ちで図書館へ行くと、本を返し、今度は人間についての図鑑を二十冊借りました。(かばんは、もうやぶれかけていました)そしてまた、その日も、朝から晩まで図鑑に夢中になっていました。

「ほお、さすが」

「あ、た、ま、ま、い、い」

「へーえ、おもしろい」

と、ごんな声をあげながら。何日かすると、ガリネコと人間に関して、サルの読むものはなくなってしまう。図書館の本も、本屋さんでも、家にある本も、すべて読んでしまったのです。そこでサルは、自分の体を、「人間的な身体」に近づけたいと決意しました。初めの何ヶ月の間、サルは二本足で立つ練習をくりかえしました。そして、やっと少しは立っているようになる、本屋でゆつのドリルやら参考書やらを買い集め、頭をきたえるトレーニングを初めました。それは、本当に本当にむずかしい問題でしたが、何ヶ月後には、サルも、足し

ルはそんなじつをきえながら、今日も屋台を出っかけています。

(完)

* * * * *

「ふう〜」

カメラさんは、大きく息をつきました。『動物の歴史大百科』を読んだ後には、必ず、とても満ち足りた気持ちになるから、不思議です。読む前が、どんな気持ちであるかというと、そうなるのです。カメラさんは、ゆり椅子に
よりかかり、「この充実感を味わっていました。その時、シカダの聲がしました。

「カメラさん、イネ」そんなから、電話です。よ〜」

「いっ、今行きまーすー」

カメラさんは、パ、パ、パ、ゆり椅子からおろりおろり、一目散に、電話めがけてかけて行きました。

みんな、ワーッと声をあげました。

「そうですね、このお祝いの記念として、私が、『動物の歴史大百科』の、最終章を読み上げることになりました」

みんなが見守るなか、ヨルさんは、秘書から『動物の歴史大百科』を受け取ると、オットンとせきばらいをし、大声で読み始めたのでした。

* * * * *

第三十章「動物が動物になったわけ」

ムラノ・ミンナ著

そのころは、まだ、「人間」という種類の生き物と、「動物」という種類の生き物しかいませんでした。しかも、二人二匹？は、双子のようにそっくりでした。

ある日、動物の家に、人間がたずねてきました。

「やあ、人間君。どうしたのかい」

「いやあ、ちよつとね。雑談を聞いてほしいわ」

「かまわないよ。そこに座して、さあなあ」

人間は、椅子に「し」かけると、話し始めました。

「君は、年がら年中同じ格好で、あきないかい？」

「いや、ス、ス、あきないよ。楽しいわ」

「変わってるといふよ。まあ、ぼくのような美意識が、ないだけかもしれないけれど」

「美意識がなくて、すみませんね。ぼくはこのままがいいんだ」

たく同じ時刻に、同じようにして、産まれていきました。同じようにお風呂に入れられ、同じ日に、命名されました。外見以外は、本当に、何もかもが同じでした。けれども、たった一つ、違うところがありました。人間の方は、何度赤ちゃんを産んでも、同じような外見の子しか、産まれませんでした。しかし、動物の方は、その時の両親の状態により、まったく別の外見の子どもが産まれたのです。たとえば、動物が毛をそった時に産まれた子は、毛の少ない子でした。逆に、動物が、面倒くさがって毛をそらなかつた日は、毛むくげの子が産まれました。動物の奥さんは、一万回出産したのですが、その一万回ぜんぶ、他の子と、同じ外見の子は産まれませんでした。これを知った人間は、急いで神さまのもとへ行き、「こう言いました。

「神さま！不公平です。動物の方は、色々な子孫を残せるのに、ぼくの方は、同じ種類の子孫しか残せないなんてー。」

「本当にそうかね？君も、君の子どもも、動物にはない能力を、色々と持っているのではないか。これで、おあいこだよ。」

「これを聞いて、人間は

「おれも、おれです。」

と、満足した顔で、帰って行きました。

(完)

* * * * *

わーっ、みんなは歓声をあげました。村長さんは、照れたように、頭をかへと、

「おめでとう、みなさん、この式を楽しもうじやありませんか。」

と、お喜びました。

た。
社

らむお





★登場動物紹介★

☆ミドリノ カメダ：一萬九千年、ハンペン国星草村出身。ハトポツ米大学卒業後、『星草村歴史博物館』を始める。サンサラ考古学賞受賞。イネコの夫。二万二十年現在星草村在住。

☆スゴイ カメコ：二万年、ハンペン国星草村出身。十代のころ、星草村歴史博物館で働きはじめる。十六歳の若さで、チューニヤオ大学に入学。二万二十年現在星草村在住。カメダの秘書。

☆シズカナ サネリ：二万年、ハンペン国月草村出身。十代になると、星草村歴史博物館で働きはじめる。ほとんど独学で音楽を学び、十七歳の若さで、クラシツクピアニストとしてデビュー。二万二十年現在星草村在住。

☆ユカイナ シカタ：二万年、ハンペン国星草村出身。十代のころ、星草村歴史博物館で働き始める。十五歳のころ、文学の才能を発揮し、国際ハンデルセン賞受賞。二万二十年現在星草村在住。

☆ミドリノ(イイ)イネコ：一萬九千年、ハンペン国外国市出身。オオリヨウリ賞受賞。カメダの妻。二万二十年現在星草村在住。

☆星草村あれこれ★ーカメダさんのメモー

①名前の由来：千九百九十六年、「コロブゾウ」という象により、今、歴史博物館がある敷地で発見された「星花」がもとになっている。

②星草村偉人(千九百年〜二千年)：考古学者ホシクサムラヤ、ジヤスピアースト、ジヤンネズミ。バレエダンサー、タラララなど。

③星草村名物：ハチミツをかため、細かくしたのを、フルーツと生クリームの星型ケーキにかけた「ホシイケーク」が、名物。

④星草村伝統：冬に、神聖なクリスマスを迎えるため、家の中の悪をとりのぞく、「ニシカン大掃除」が、古くからの伝統。

あじがね

星草村を、最後まで読んでくださった方、ありがとうございます。おもしろい、と思ったださった方がいれば、ぜひ、ありがとうございます。星草村は、いつも気に入っているおはなしです。だから、このお話を読んでくれたみなさんが、気に入ってくれば、もっと好きなお話になると思います。今後も、どうぞよろしくお願ひします。

2012年3月10日 自筆

せ

星草村歴史博物館のおはなし

2012年3月18日 第1版 第1刷

著 者 せい

画 家 せい

発行者 SEIBUNKO



●連絡先 感想をお寄せください

E-mail : kameda@seibunko.com

<http://www.seibunko.com>

(C) 2012 SEIBUNKO All Rights Reserved

